
けいおん! 僕の放課後ティータイム

吹影鏤塵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 僕の放課後ティータイム

【Nコード】

N1092X

【作者名】

吹影鏤塵

【あらすじ】

エリートコースを歩んでいた出圭一^{いでけいち}は、高校の理不尽な人員削減に遭い、転校を余儀なくされる。新しく編入した私立桜が丘高校は、ほのぼのとした、エリートに相応しく無い学校だったが、彼はここでの出会いで、自分の存在意義を少しずつ見出していく。

けいおん！の二次創作小説です。

更新遅れがちですが、頑張って更新していきますので宜しくお願い

します。

人物紹介

いでけいいち
出圭一

主人公。

府トップクラスの府立日の出高校に合格した超エリート男子学生。
ただ体育だけは苦手。
稀に過去に何かあったかのような発言をするが、周囲には何も打ち明けない。

父親の世界武者修行につき合わされたからか、楽器はピアノはもちろんエレキトリック・ギターから木琴、チューバ、更には馬頭琴まで弾きこなす腕の持ち主。

集団生活と「女子」を苦手としていて、旧友の律としか異性とマトモに会話できないので、桜ヶ丘高校の生活にはかなり不自由しているようだ（スク水的な面では苦労していないとも語っている。性欲は年並にあるのだろう）。

趣味は家で聡とFF?の2Pプレイをすること。ファイナルファンタジー最近あおまは青魔道士縛りに凝っているらしい。

ますだゆうき
鱒田勇来

一年二組の担任。

新任の男性教師で、大学院を出たばかり。大学院ではモテモテだったらしい。俗に言う、「若手イケメン教師」。

圭一にいろいろと気を揉む。そのためか学内の一部でホモ疑惑が浮上した。

超熱血でもあり、まれにあの台詞も言う。

第壹茶 転校

―圭一―

「ここか…。」

俺はGoogleから引っ張ってきた地図を横目で見て、書いてある情報とここが一致しているか確認する。ふう、どうやらココで間違いないらしい。正門の前の道路を挟んで水田があるし。

俺は、五月から編入するここ、私立桜が丘高等学校の下見をしに来ていた。

私立桜が丘高等学校。このあたりでは屈指のトップ校であり、東大に受かる人間も年に四、五人いるらしい。

しかし、ココが女子高でさえなければ、

「俺だって『普通』の高校生活」をエンジョイできたのにな…！」
やべ、口に出た。

★

俺が無難な府立日の出高校に合格して半ヶ月たった日のこと――

「出、昼休みに職員室に来てくれ」

友達との話に急に横槍を入れてきた担任は、俺を職員室に呼び出した。いや正確には「来るように言った」か？同じか。

「へ？お、俺何かやっちゃいましたっけ？」

「そんなことは無い、ちょっと会長がこの時間に学校に電話するか、とかね」

うちの父さん、PTAの会長だからって職権乱用だろ…。学校の

電話も好きに出来るほどPTA会長の権限ってすごかったか？

「は、はあ」

とりあえず了承して、担任はあわただしく職員室に引返していった。高校の先生ってやっぱり大変なのかな。

「出、どうしたんだよ？」

高校一人目の友達の松崎が聞いてくる。

「いやあ、かなり面倒なことになったかものです」

「へえ、どんな？」

「わからないですとも」

いや、ちよつと嘘かな……。父さんからこういう電話がかかってくるのは一度目や二度目じゃない。そして、父さんがこういう電話をかけてくる時は決まって……。――。

「また引越しかよ！？」

『違うわ！もっと違うことだよ』

昼休み。先生方が働いておられる職員室で、俺はものすごくアレな声を出してしまった。

「プッ……」

「クスクス」

「ツ……」

俺は大慌てで持っていた受話器を口から離し、周りに頭を下げた。俺の悪い癖……。反省反省。

「ど、どんなこと？」

『詳しいことは流石の俺でも教えてくれなかったが、圭、お前に妙な烙印が押されているみたいでナ』

「烙印？」

『【三月時点では本校に合格していたものの、後日行われた厳正な審査の結果不合格とする】って書類に書いてあった』

「え？」

最初、俺は父さんの言っていることが分からなかった。で、でも

待ってくれ…、それだと…。

「俺は本当は合格してなかった、って事かよ!？」

『こんな馬鹿な話あるかって思ったけど…。校長の話とかお前の調査資料とか見てそうはつきり決まってるみたいだな』

……………。

『まあ、学校の件なら心配するな。今、お前が併願で受けてた桜高の校長に頭下げてきたから――』

「なんでそんなに冷静なんだよ」

静かに言った。すべてを知るはずの校長は今出張で不在だった。

職員室の空気も凍り付いているようだ。

『お前の為だよ』

でも父さんは俺の怒りにも冷静に、いや冷淡とも思える口調で返した。

『一番この状況にむかっているのはお前だって分かってるが、二番目にむかっているのは父さんだ。お前だけじゃないから。絶対だ』
こういうときに父さんはカッコよくて、だから俺も父を憎めなくなってしまう。怒りのはけ口がない。

『とりあえず、日の出高校に戻るまでは桜が丘高校に。後は俺に任せてくれ』

絶対にお前を日の出高校に戻してやるからな。

そういつて、父さんは電話を切った。

★

「なんだかなあ…」

父さんに入れといわれたここ、桜が丘高校は、日の出高校とは圧倒的に違う部分が二つばかりある。

一つ目は、やはり男子の割合が少ないことだ。俺、実は女子は大学の苦手なのです。なんだか、怖くて。

二つ目は、ほのぼのしていることだ。え、語彙不足だなあ…ププ

ッ？失礼な。これ以上に桜高の雰囲気を表す擬音など存在しないといっただけですとも！

日の出高は実は桜高よりも高レベルな進学校で、荘厳というか、ちくちくしている。ちょっと校風を調べなさ過ぎだったか。ほのぼの、ってのもなんだか俺の性に合わない。

「でも行くしかないんだよねあゝ…。」

結局、俺はいつも大人の言いなりか。そう一人ごちて、俺は校内に這入った。

――漣――

「みおゝ！部活いこゝぜゝ！」

「あ、律。ゴメン、今日日直だから遅れていく！」

「マジ？分かった、唯達にも伝えとくよ」

「悪いな、お願い」

授業が終わり、放課後になる。

律に部活に遅れる旨を伝えて、私は教室の黒板消しを手にとった。思っていたより黒板消しにくつついていた粉が落ちて、私のブレザーの袖を汚してしまう。

「うわっ、結構付いちゃったな…」

仕方が無いので、私はブレザーを脱いで、Yシャツの袖を捲った。コレなら大丈夫だろう。

「よしっ、始めるかな」

何週間に一回くらいしか回ってこない日直の仕事だけど、しっかりとやらないとな！

そう思いつつ、私は再び黒板消しを手にとって、今度は窓際に移動する。こう言うときはやっぱり…。

窓を開けて大きく息を吸い、息を止めて、黒板消しをはたいてやった。

ぼふっ…

け、煙い！私は思わずむせてしまった。

「げほっ、ゴホッ、もおー、最悪…」

ま、前の日直こんなになるまで放置してたのか…。もっと定期的にこれ綺麗にしないとダメだろう！

今度生徒会に黒板消しクリーナーの設置を申請してみようかな…

「って、ダメダメ！」

いけない、そんなことしたら周りから目立ってしまう！

ふう、我慢するしかないか…。頑張ろう。

黒板消しを綺麗にし終えて、窓を閉めようとした時、私の目に不意に見慣れない人影が映った。

怪しいその男は正門前にいて、この校舎を睨め付けている。つと、今歩き出した。

「こ、怖い…」

怪しい男はどこかの学校の制服を着ていた。不良…というわけでは無いみたいだ。腰パンとかワックスで髪整えたりとかしてるわけではなく、あくまでも普通の男子生徒。

ただ、すぐく目つきが悪かった。男が目を細めると、とたんに怖くて動きが取れなくなってしまう。

でも、私は、——何でこう思ったかは今でも分からないけれど——彼が気になった。

男が職員玄関に入ってしまったのを見届けると、私は鞆を掴んで教室を飛び出した。

今になってみると、さっき思ってたことよりもこっちの方がはるかに周りから目立ってしまうことにすら私は気付いていなかった。

第貳茶 再開と邂逅（ファーストコンタクト）（前書き）

お待たせしてしまい申し訳ありません！

試験が近くて勉強三昧で・・・。

それでは，拙文ですが，どうぞ。

「け、圭一君？」

「その通りですとも！」

久しぶりだな、和…。

桜ヶ丘に来て五時間ちよつと。旧友と再開して俺はようやく、肩の力を抜くことが出来たのだった。

— 濤 —

教室を出て、階段を駆け下りる。いつもはしない二段抜きをして。

なんでこんなに焦る必要があるんだ？

頭の中でそんな言葉がリフレインされる。確かにココは女子高だから、男子がココに居るなんておかしいはずだ。でも私はこんなことに首を突っ込むタイプでは無いことは私がよく知っている。

では、なんでだろう？

決まってるだろ、大事件じゃないか。

そんな事言っちゃって、今までこんなことに興味も示さなかったのに。

でも、なんか気になったんだ、なんか…。

階段を降りきると、廊下の影からその人が現れた。

「職員室に行きたいの？」

俺が頷くと、和は俺についてくるよう促した。

滑稽こっけいな図である。

廊下を特に何も気にするでもなく悠々と歩く少女と、その後ろを周りを気にしながらへっぴり腰でついていく男。滑稽うっけ、滑稽うっけ、烏骨けい鶏。

和という協力者を得られたものの周りの俺に対する奇異の視線は消えることを知らない。というかあんたら部活はどうした。

「女子高だしね、ここ」

「待て待て待て待て待て」

ちよ、あんた女子高生っすよね？花も恥らっちゃう女子高生っすよね？

「何で俺がこんなトコに来るのかって……聞かないのか？」

正論をぶつけたつもりだった。でも和は、「何にも変わって無いね」とため息混じりに言うど、

「みんなおじ様から聞いてるわ。まあ、そのほかのこともお見通しだけどね？」

マジかよ……。父さん。

そんなことを話しながら、俺と和は廊下を曲がる。すると、

「ひゃっ」

「わっ，すみません！」

女子生徒とぶつかってしまった。強くぶつかってしまったらしく、彼女は尻餅をついていた。あわてて俺は手を差し伸べる。

「大丈夫ですか？」

「…だ，大丈夫………」顔が真っ赤だ。

彼女は綺麗だった。鴉の濡羽のような鮮やかな黒髪をロングにしている、おっぱいも大きい。よく見れば目はちよつとウルツとしていて、男の隠れた庇護欲を発揮させるには十分だった。

え？説明がエロい？ほつといってくれ、俺だって健全な男の子なんだよ！

「濡！？大丈夫？」

和が女子に駆け寄る。ん？ミオ…？どこかで聞いたことある名前だな。



夕方。五月のさわやかな風が俺の横を通り過ぎていく。

あのあと、ぶつかったミオとか言う子と別れ、俺は無事、職員室へとたどり着けた。和はこの後生徒会の仕事があるようなので、職員室前で別れた。

「頑張ってね」と、微笑みをたたえながらそんな言葉を残して、

旧友は廊下を小走りで駆けていった。

そして、職員室で桜高の校長とファーストコンタクト。父さんは結構無理を言ったらしいが、彼は穏やかに俺の話を聞いてくれた。

ということで俺は、学校に入学書類やらなんちゃらかんちゃらを渡して、無事、来週の月曜から正式に桜ヶ丘高校に入学することが決定したのである。

で今は、この帰り道。

俺はまた町を徘徊している。今度はGoogle先生謹製の地図ではなく、FAXで送られてきた手書きの地図を右手に持って。

桜ヶ丘には、俺が普通っていた小学校や保育園があったから、土地勘はある筈なんだが…。

俺は父さんの計らいで、旧友の家に居候させてもらうことになっていた。日の出の方から通っているといういろいろと問題があるからだそう。父さん：何考えてるんだろう。

「あつた…」

目印のコンビニエンスストアを発見し、その横の路地を入った所に、『彼女の』家はあつた。

俺は躊躇なく門をくぐり、インターフォンを押す。

ガチャ…。

「…」

「やあ、相変わらずカチューシャ似合うね」

「…」

「ん？」

「…目つき，変わったな」

そうかな…。小学校のころから変わってない自負があるが。

目の前の人物は，俺をしばらく観察していたが，そんなことは後でも良いと思ったのか，声音を明るくして，

「ひさしぶり，いっちゃん」

昔のあだ名で，呼んでくれた。

彼女の名前は，田井中律。

俺の心の雨に，傘をくれた人だ。

第貳茶 再開と邂逅（ファーストコンタクト）（後書き）

吹「文章が…」

圭「終わっている…」

吹「どうしよう」

圭「俺に聞くなよダメ作者」

吹「とりあえず、次話投稿は作者の日程の都合上一週間後くらいになつてしまう恐れがあります。申し訳ございません」

「心の雨に傘をくれた」：福山雅治「最愛」より

第参茶 何故だか、気になって（前書き）

今回は三人称視点で。疾風怒濤のダメ出し、どうぞお待ちしております（はーと）

第參茶 何故だか、氣になって

翌日。

「ほほお、桜高の男子制服！」

やっぱネクタイ青なんだーだのあっポケット一つ多いぞずるーいだの、圭一は律の昨日とは違う好奇の視線をうけていた。

正直言つて、勘弁して欲しかった。女子とはいままで無縁な生活だったのに、いきなり運命の悪戯でこんな女の花園に放り込まれたのである。

考えてみれば、自分は同じ学校の女子——和とは話しているうちにウマが合ったのでいつの間にか除外していた——と友好的な会話をしたことが無いなど彼はため息を一つ吐いた。

要するに、彼は「女性」が苦手だったのである。

「り、律…もういいか？もう時間無いんだけど」

いい加減耐え切れなくなったのかおずおずと口を開く圭一。

「えーっ？良いじゃん別にー」

「こんなの一緒に学校に通ってれば見飽きるだろ？」

「あ」

「今気付いたんすか律さんや……」

律が学内ではどのようなキャラで通っているのか未だに掴みきれ

ない圭一だった。



「いってきまーす」

「い…ってきます」

挨拶をして、ふたりは家を出た。まだココが他人の家という意識が働いているからか、圭一の挨拶はたどたどしい。

「べっつにそういうの気にしないで良いのにさ」

「いや、ホームシックってわけでも無いんだけど、何だかな…」

「枕が替わると寝れないタイプみたいなの？」

「そんな感じかねえ…」

ふたりで何年間分の会話を交わしていると、すぐそばの路地から見知った顔があらわれた。

ありれ？あの黒髪、あのおっぱい、あの姫カットは――。

「っはよー」

「おはよー…り…っ…?!?!?」

澤は、親友とのいつもの待ち合わせ場所に昨日のぶつかった男が居た、という事に驚いただけではなかった。

「な、なんでそんな仲良さそうに…」

「(重大な勘違いが起こっている)」

「(フッフ、これこれ!この顔!)」

まさか親友が男と連れ立って…。滯は今、混乱の境地に立たされていた。

その反応を面白がり、律はなんと圭一の腕を取った。

密着具合が、もはや恋人同然だった。

「あっ」「ふふん」「フェエッ!？」

もう律と一緒に学校に行くのやめよう…と圭一は強く思った。

☆

圭一は転入生なので、朝のHRまでは担任の先生と一緒にいることになる。

職員室へ向かう圭一——律のイタズラのせいか、朝なのに疲労の色が顔に浮かんでいた——と別れ、滯と律は教室に這入り、授業準備を済ませる。

朝早く来た筈なのに、教室はクラスメートでゴった返していた。律はそんな教室の喧騒を右から左へと受け流しながら、先ほどから不機嫌気味な滯に状況説明を試みた。が…。

「いっちゃん別は彼氏って訳じゃなくってな？」

「嘘だな」

「どうしてさ？」

「だって！今だってあだ名であの人のこと呼んでるし…、そそ、それに、あんなに…」

「あんなに密着しちゃって？」

「…そうだよ。ってか大体何で私に何にも教えてくれなかったんだよ？」

家、行きにくくなるじゃないか……。最後に弱弱しくボソツと付け加える漣。やれやれ、本当に異性苦手なのな……。と律は思った。

「べつに？ いっちゃんは明るくて、優しいやつだからさ」

いつもならコレをネタにして更に漣をイジる所だが、流石に自重した。言っちゃいけないこともある。いっちゃんはホントに優しいんだから、漣。

—漣—

「出圭一です。日の出高校より転校してまいりました。」

教卓の前で淡々と自己紹介を告げるのは、出君という、昨日ぶつかった人。……。じゃなかった、転入生の男子だ。

中学校のころの男子は落ち着きが無い小学生みたいな人たちで、彼も律と同じような意気揚々タイプの人間だと思ったが、そうでは無いらしい。

「（ちょっと……暗いかな）」

私みたいに、人にあまり積極的に触れたがらなさそうな人、というのが、この教室に這入ってきてからの彼の第一印象だった。

先ほど律と話していたときは、輪に入れない私のことをちらちら気にしながらも、幼馴染と笑い合ってたさえた彼。

それなのに、今の彼は、笑顔を顔に貼り付けているものの、まるで氷のような冷たい視線——周りの子たちは気付いていないらしい

——で周りを見ている。冷えている。
…なんで？

「それと、楽器の演奏が好きで、いろいろな楽器を演奏できるのが僕の特技です」

…え？

「あーえっ…と、一年間よろしくお願いします」

鳴り響く拍手で、ようやく私は我に帰った。

「よし、じゃあ出の席は…、田井中の後ろで」

それと一緒に、何かが胸の内からこみ上げてくるのを感じた。

「よし、じゃあ今日はテスト三日前だから気合入れて勉強するようにな！じゃ、日直！」

やっと真面目に練習できる…！演奏の幅が広がる…！ちよつと怖いけど…、でも楽しくなりそうだ！

先生の諸連絡を全部聞き流して、私は一人、恍惚に浸っていた。
その横では出君が顔を真っ青にしていた。

第参茶 何故だか、気になって（後書き）

吹「またまた遅くなりやした」

圭「いい加減にしろ」

ますだゆうき
鱒田勇来「まあ人生何事も気合が肝心だ」

吹「ゲ、面倒なヤツが」

圭「ちよつと先生から一発，ガツンといってやって欲しいのですが……」

鱒「スケジュールなんか気にするな！お前のやったことすべては正しい！」

圭「遅れたことを正当化しようとしてもダメですよ（怒）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1092x/>

けいおん! 僕の放課後ティータイム

2011年11月13日12時44分発行